

# 死神

紺屋淳之介

寝苦しさから眼を醒ますと、枕元に男が立っていた。三十路に掛かったと思しき風体に黒いスーツ、黒いネクタイを締め、革靴のままで立っていた。

「今晚は。わたくし、死神でございます。」

寝ていた男は驚いて飛び上がり、横に置いてあった愛用の拳銃に手を掛けた。

「そのような物騒な物を使われては困りますな。」そう云いながらも、死神は笑顔を絶やすことはなかった。

「本来でしたら、このようにお客様の前に姿を見せることはないのですが、実はお客様、一億人目のご予約の方です」

「そのような予約をした覚えはないぞ。」上ずる声で、男は答えた。

「ご予約は、所謂神様から承っております」死神は、これまた黒のブリーフケースから一冊の書類を取り出した。

「こちらサービス業でございます。ところで、我が社が創立して一億人目のお客様ということで、こちらにサインを頂けますとお好きな死に方をお選び頂ける特典が付いてございますが、如何致しましょうかな。」

気がつくや、男の手にあったはずの銃は死神の足下に落ちていた。どうやら本物のようだな、と男は思い始めていた。

「そうか。しかし一億人目とはな。随分と儲かっているじゃないか。」

「はい。我が社は新しい方ではございますが、お陰様で忙しくさせて頂いております。」あくまで事務的な口調で、死神が云った。

「一度でいい。俺もそれぐらい稼いでみたいものだ。」

死神の目つきが若干、変わった。

男は契約を交わした。

その望みは、街の人間総てを彼の客にさせることだった。

十年後、男の所には毎日抱えきれない程の依頼が舞い込んできていた。最近では隣町からも、彼の腕を聞きつけて来る客がいるほどだった。そしてそれは単に死神の力だけだった訳ではなく、彼の腕が確かだったからでもあった。

忙しさの中でようやく、男は充実というものを感じていたが、ここ数日になって段々と依頼の数は減り、男の脳裏には自らの死がよぎっていた。

ある晩。男はベランダで一人、スコッチを傾けていた。結局今日の依頼は二件だけ、それも同時にこなさなければならないものだったが、それでも男はその腕でそれらをそつなくこなしていた。

不意に生ぬるい風が吹き、男は人の気配を感じた。

「来たか。」男は振り向きもせず云った。

「お久しぶりでございます。お客様のお仕事は本日で総てでございました。」声はやはり死神だった。

「それではお時間でございます。」

「わかった。覚悟はとうにできている。」男はスコッチを飲み干すと、ベランダから飛び降りた。

ベランダの向こうは闇だった。

そこに街はあったが、灯りは全くなかった。

灯りだけではない。その街には人間というものがいなかった。

男は殺し屋だった。